

ぐれーすけーる

喫茶店 (深夜)

テーブルが一つ、椅子が二脚置かれている。暖色系の光が、それらを照らしている。そこで墨田と白根が久方振りに再会する。

ゆつくりとした明転

黒いシャツを着た墨田、板付きで舞台中央の椅子に腰掛けている。テーブルの上には、カップが一つ。両手で頬杖を突き、只々、一点を見つめている。

墨田「(不規則な呼吸音)」

ドアベルが鳴り、白いスーツ姿の白根が上手から登場。

白根「なんで俺がこんな時間まで残業なんだよ」

白根、テーブルの前で立ち止まり、墨田を凝視する。

白根「誰かと思ったら墨田じゃん！  
ウエーイ」

白根、ハイタッチを求めるが、墨田は

無反応。

白根 「ウエーイ……」

白根、墨田に近づき耳元で叫ぶ。

白根 「ウエーイ！」

墨田、絶叫しながら椅子から転げ落ちる。

墨田 「なに？ なに？」

白根 「ウエーイ」

墨田 「あれ？ 白根、何やってんの？」

白根 「ウエーイ」

墨田 「ウエーイは、もういい、って」

白根 「いい加減、目をガン開きで熟睡するのやめろよ」

墨田 「僕だってやめられたら、やめた  
いよ」

白根 「それにしても、久しぶりだな。

いつ以来だ？ 半年前にやった  
同窓会以来か？」

墨田 「えっ、えっー！」

白根 「半年ぐらいで、そんなに驚くな  
よ」

墨田 「そこじゃないよ！ 僕は同窓会  
があつたなんて知らないよ！」

白根 「いや、お前いたよ」

墨田 「いないよ」

白根 「いや、お前いたって。料理を元  
気に運んでたじゃん。』はい、

よろこんでえ』ってさ」

墨田 「それ店員」

白根 「そうなの？ あっ、だから思い

出話しても愛想笑いしかなか  
ったんだ」

墨 田 「白根と会うのは、一年ぶりくらいかな」

白 根 「そんなもんか。立ち話もなんだし、座れよ」

墨 田 「そ、そうだな」

テーブルを挟んで椅子に座る（上手側に白根、下手側に墨田）。

白 根 「おっ、何飲んでるの？」

墨 田 「コーヒーだよ。この店は珍しい豆を扱ってるから試してみなよ。ちなみに、ここはセルフサービスだから」

白 根 「喫茶店なのにセルフ？」

墨 田 「しかも、マスターは厨房でヘッ

ドホンしてネットゲやってる」  
白 根 「この店、商売する気あんのかよ」

白根、上手に消え、黒い液体の入った二つのグラスを持って戻ってくる。

墨 田 「アイスコーヒー？ 二つ？」

白 根 「何？」

墨 田 「いや、僕はコーヒーがまだ残っているからいらないよ」

白 根 「はあ？ 何言ってるの？ お前にやるわけないだろ。両方、俺のだよ」

墨 田 「アイスコーヒーを二つも？」

白 根 「違うよ。コーラと黒ウーロン茶だよ」

墨 田 「えっ？」

白 根 「だから、コーラと黒ウーロン茶

の最強タッグだよ。コーラは甘くて美味いけど、高カロリーだろ？ 黒ウーロン茶は苦いけど、脂肪吸収を抑えてくれる。ほら、プラマイゼロじゃん」

墨 田 「ん？ いや、プラスだよ」

白 根 「いや、ゼロから微動だにしないね」

白 根、二つを交互に飲む。

白 根 「(上着を脱ぎ、椅子の背もたれに掛けながら) んで、どうしてお前は深夜の喫茶店で一人寂しくコーヒーを飲んだの？」

墨 田 「僕はお酒が飲めないから、ここが行きつけのバーみたいなものかな。白根こそ、どうしてここ

に？」

白 根 「外回りの仕事で、さっき終わったんだよ。終電ないし、ここで始発まで時間を潰そうと思ってね」

墨 田 「忙しそうだね」

白 根 「まあ、忙しいけど、忙殺される程ではないかな。ただ……」

墨 田 「ただ？」

白 根 「ただ……、上司がね」

墨 田 「厳しい人なの？」

白 根 「いや、単純に嫌な奴なんだよ。俺のやる事なす事にダメ出ししてくるんだよ」

墨 田 「それはちよつと面倒だね」

白 根 「そうなんだよ。この前なんかさ、ほら、俺の仕事って日常的に弓矢を使うじゃん？」

墨 田 「ああ、あの刺さった者同士が好意を寄せ合う、アレね」

白根「そう、アレ。(弓を射る仕草を

しながら)暇だったから、会社の屋上から射って遊んでたのよ。そしたら、上司がブチ切れよ」

墨田「うん、それは切れるね」

白根「だろ？ 理不尽極まりねえよ」

墨田「いや、上司が怒って当然、ってことだよ」

白根「えっ、なんで？ すごい楽しかったんだよ？」

墨田「そういう問題じゃないよ。アレはさ、優秀な種の保存が目的なんだから、誰彼構わず射って良いものじゃないでしょ」

白根「お前な、出会いと別れはエキセントリックじゃないと、つまらないんだよ」

墨田「それは人それぞれだよ」

白根「出ました。お前から常識人は、すぐに『人それぞれ』って言葉を

使って考えることから逃げるんだよ」

墨田「はいはい、もう、その問答には飽きたよ」

白根「またそうやって逃げるのな。まあ、いいよ。それじゃあ、お前の方はどうなんだ？ 仕事は順調なのか？」

墨田「それが……、順調ではないんだよ。正直に言って、僕は今の仕事に向いていないのかもしれない」

白根「まあ、確かにお前には向いていないかもな。今はどんな業務に就いてるんだ？」

墨田「”悪い夢“ 事業部だよ」

白根「なんだよ。楽な部署じゃないか。もつと、こう、人を災難に遭わせたり、犯罪に走らせたりする部署かと思ってたよ」

墨田「僕にとっては、うちの会社のどの部署も楽じゃないよ」

白根「悪い夢を見せるだけだろ？ 実際、人が不幸になるわけでもありません」

墨田「僕は苦悩や恐怖に人が顔を歪めるのを見たくないんだ」

白根「それじゃあ、仕事にならねえだろ。マイナスがあるから、プラスがあんだよ。悪い夢があるから、良い夢があんだよ。毎日、エロい夢なんか見せられてみる。ただのグロじゃねえか」

墨田「そんなことは白根に言われなくても分かってるよ」

白根「分かってねえよ。そんなんだから、その歳になっても童貞なんだよ」

墨田「それとこれとは関係ないだろ」  
白根「あるよ。直結してる。お前はさ、

良い事しか見ようとしないうし、見せようとしないうんだよ。それで他者と共生してるつもりか？ お前のことだから、どうせ好きな人はいるけど、なにもアクションを起こしてない、とかそんなところだろ？」

墨田「そんなことはないよ。ちゃんとメールしてる」

白根「どんなメールを送ってたんだよ」  
墨田「そんなの白根には関係ないだろ！」

白根「いいから教えろよ。客は俺たちしかいないし、それに恥ずかしがる歳でもないだろ？」

墨田「何なんだよお」

墨田、携帯電話を出し、メールを確認する。

白根「ほら、読めよ」

墨田「じゃあ、一通だけね」

白根「おう、分かったから早く」

墨田「わかったよ、『月が綺麗ですね』」

白根「(読むのを遮り)夏目漱石?」

墨田「何が?」

白根「えっ?」

墨田「ちゃんと月の画像も添付したよ」

白根「そういうことじゃないんだよな」

あ。相手からの返信は?」

墨田「ない」

白根「そりゃあ、そうだよな」

墨田「これ、って脈ナシ?」

白根「まだそこまで行ってないよ。お

前は断られるのが怖くてデート

にすら誘ってないんだろ?」

墨田「うん」

白根「だからといって、俺が助言をし

たところで、お前は行動に起こせないんだろ?」

墨田「う、うん」

白根「だったら、詰みだよな」

墨田「そんなあ」

白根「でも、俺には策がある」

墨田「策? まさか……」

白根「そのままかだ。(弓を射る仕草

をしながら)アレを使えば脈す

ら作ることができる。ただ、問

題がある」

墨田「職務規定か」

白根「その通り。私用は厳禁なんだ」

墨田「なんだよ、策なんてないじゃないか。どうすりゃいいんだよお」

白根、頭を掻きむしる。

白根「いや、俺はお前のために射るよ」

墨田「その気持ちは嬉しいけど、リスクが高すぎるよ。減給どころじゃ済まないぞ？」

白根「そんなことは重々承知してるさ。俺とお前の仲じゃないか」

墨田「白根、君って奴は……、ありがとう！ 恩に着るよ！」

白根「礼は童貞を卒業してから言ってくれ。じゃあ、次は、お前のリスクについて話そうか」

墨田「ん？ どういうこと？」

白根「いやいや、何言ってるの？ 何が楽しくて俺だけリスク背負わなくちゃいけないんだよ。そういうことだったら、この話は無しだ」

墨田「えー、わかったよ……。じゃあ、僕は何をすればいいんだ？」

白根「俺の上司に悪い夢を見せろ」

墨田「そんなことしたら減給じゃ済まないよ」

白根「同等のリスクじゃないか。やめるか？ 俺はお前の選択に従うよ。ただ、お前はリスクから逃げ続けて、リターンを取れない人生で良いのか、ってことよ」

墨田「白根、僕はやるよ！」

白根「そっか、じゃあ、さっそく頼む」

白根「思い立ったが吉日、だ。それに俺はアレを持ち合わせていないからな。お前は持つてるだろ？」

端末機

墨田「マジかよお」

墨田、足元にある鞆から小型の端末機を取り出す。

墨田「(端末機を弄りながら) んで、  
どんな悪い夢を上司に見せたい  
の？」

白根「日常生活でフラッシュバックす  
るくらいキツイやつ」

墨田「じゃあ、僕がベロベロと全身を  
舐め回す感じでいい？」

白根「気持ち悪っ！ 完璧だ。それで  
行こう」

墨田「あとは、個人識別番号だな。あ  
っ、そうだ！ 無理だ！」

白根「なんだよ。怖気づいたのか？」  
墨田「そうじゃないよ。君の会社の人  
には、悪い夢を見せられない。

僕の会社と君の会社は互いに干  
渉し合わない、という協約があ  
るのを知らないのか？ それに  
アクセスがないと無理だ」

白根「それ、ちよつと貸してみ」

白根、端末機を奪い、弄りだす。

墨田「何をするんだよ」

白根「(端末機を返しながら) えっと、  
これでよし、っと。送信！」

墨田「どうしてお前が上司のアクセス  
キーを知っているんだ？」

白根「アイツはズボラだから生年月日  
で統一してんだよ」

墨田「じゃあ、例の協約はどうするん  
だよ」

白根「バレない、って！ “天然の夢  
”と“人工の夢”の区別なんて  
つかねえよ」

墨田「まあ、確かに……」  
白根「だから、心配するよ。これで

前のやるべき事は終わったな。

あとは俺が明日にでも、お前とお前の意中の人を射るだけだ」

墨田「頼むぞ。手元が狂ったなんて許さないからな」

白根「そんなに心配なら、ゼロ距離で射るけど？」

墨田「それは怖いよ……」

携帯電話の呼び出し音が鳴る。

白根「おい、電話」

墨田「あ、あの人からだ！」

白根「誰から？」

墨田「僕の愛しい人からだよ！」

白根「良かったな。早く出ろよ」

墨田「うん、ちよっと席を外すよ」

白根「好きにしろ」

墨田、離席し、下手側で数十秒の会話（ジェスチャーのみ）。その後、力なく着席。

白根「なに浮かない顔してんだよ。好きな人からの電話だったんだから、もっと喜べよ」

墨田「あのさ、白根。君の上司の名前を覚えてくれる？」

白根「なんだよ、急に」

墨田「もしかして、“灰谷さん”じゃない？」

白根「そうだけど。えっ、知り合いな？ アイツ嫌味な奴でしょ？」

墨田「良い人だよ……」

白根「またまた、ご冗談を」

墨田「良い人なの！ 『墨田さんが私

---

に悪い夢を見せるわけがない。  
「協約に関わることだから、私が  
責任をもって調べます。私は墨  
田さんを信じます』って電話を  
深夜にかけてくるくらい良い人  
なの！」

白根「それって……」

墨田「僕の愛しの人と君の上司は同一  
人物だ」

白根「やべえじゃん」

墨田「どうするの？ バレたら僕は協  
約違反アンドど変態だよ？」

白根「まあ、違反もしてるし、舐め回  
したんだから、間違っつてはいな  
いよね」

墨田「(テーブルに突っ伏しながら)

「終わりだ！ 僕は終わりだ……」  
白根「そうだな。終わりだな」

---

白根、椅子に掛けている上着から拳銃  
を取り出し、墨田に発砲する。銃声。

白根「アイツは嫌な奴だよ。これは事  
実だから」

白根、携帯電話で電話をかける。

白根「もしもし、灰谷さんですか？

はい、一段落しました。後片付  
けしたら撤収します。一つ聞いて  
良いですか？ メールがウザ  
いから、って理由でここまでや  
る必要があったんですかね？  
はい、すいません、無駄口でし  
た。失礼します」

---

白根、拳銃とグラスを持って、上手に消えると同時に携帯電話の呼び出し音が鳴り始める。

ゆっくりとした暗転

呼び出し音がだんだん大きくなる。

ゆっくりとした明転

白い上着を着た墨田、両手で頬杖を突き、只々、一点を見つめている。けたたましく鳴る呼び出し音に目を覚まし、電話を取る。

---

墨田「はい、墨田です。いえ、寝てません。はい、えっ、アレの矢が納品されていないんですね。申し訳ありません。すぐ会社に戻って確認いたします。はい、確認次第、折り返し連絡いたします。はい、失礼します」

墨田、足元にある鞆を取り、足早に上手へ向かう。黒い上着を着た白根が下手から現れる。墨田、気配を感じ、振り返る。

墨田「エキセントリックな出会いと別れだな」

---

白根、満面の笑み。

急速な暗転

(了)